

## 「家」に「住む」を再考する

生活美学研究所研究員・武庫川女子大学生活環境学部准教授

鎌田 誠史

家に住むということを再考するという事で、そんな大層な話ではありませんが、コロナ禍における家の変化について、少し言及できればいいかなと思っております。特にその中でも、家で働く、あるいは学ぶということを考えたいと思います。われわれを含めて、今までの住宅は、休む、寝るというだけの機能だったものが、突然、コロナ禍によって仕事場になったりとか、そこが教室に変化したりしました。そして、先ほどの小泉先生の話にもありましたが、職住近接というのは本当に普及するのかどうか、そういったところも話できればと思います。その2点から、日本の住宅というのは今後、変化する余地はあるのかどうかというところを少し探っていきたいと思います。

まず、データに見る住まいの変化ということで、ミサワホーム総合研究所が調査した、「コロナ禍における住まいの課題」として、部屋の隔離とコロナ罹患の関係を出していますが、部屋を隔離している罹患の人数が、隔離していない罹患者の約半分ぐらいの罹患率に抑えられている。やはり隔離というものはすごく有効だということが分かります。厚労省も、日本環境感染学会も隔離に対しては一定効果あるという見解を示しています。しかし、このように感染者と他の同居者の部屋を可能な限り分けることは、本当に可能かどうか。今の特に都市における住宅に、そういった余地があるのかどうかということも少し話したいと思います。

それから、リクルートも大きな調査をしています。コロナ禍におけるテレワークの際の住宅に対する不満について、2020年5月ぐらいの報告によると、オンオフの切り替えがしづらいということはちょっと置いておいて、2番目にくるのは住宅の専用スペースがないということ。それからデスクとか仕事用の椅子がないということ。それによって、住宅の中でオンオフの切り替えができる空間もないということが分かります。つまり、住宅側にテレワークの余地が少ないのではないかということですね。では、実際どこでコロナのときにテレワークを実施したのかというと、圧倒的にリビングダイニングが多いわけです。

その次に、リビングダイニングに専用のデスクを置いているパターンも足せば、リビングダイニングで頑張って仕事、あるいは授業を受けたという例が圧倒的に多いということがわかります。一方で、専用ルーム、要は書斎等を持っている家は極端に少ないということが、これで見取れるわけですね。ただし、調査時期は2020年の外出控えてくださいという時期だったので、例えば近所のカフェとか、それからサテライトオフィスも閉鎖していた時期なので、これはほとんど使われてないということになりますね。さらに寝室とかベッドルームでオンライン会議とか授業を受けられていたパターンもありますし、トイレが結構有効であったという報告もあるようです。トイレで仕事をするという新しい時代ですね。

また、クックパッドが、これも結構大きな調査をしています。コロナ禍で住まいの要望について、8割ぐらいの人が住まいの環境を改善したいという結果でした。改善したい部屋はどこな

のかを見ていくと、リビングです。ここで見て取れるのは、家は休む場所から暮らしを楽しむ場所へ変化し、コロナ禍で家に家族が集まったという調査結果を見ても、暮らしを楽しむ場所の受け皿であるリビングがなかなか空間的に成立してなかった可能性が指摘できるのではないのでしょうか。このようなデータを見つつ、次に学会の動向を見てみると、特に建築学会の動向を見ると2020年から現在2022年に至るまでコロナの特集は1回となっています。住まいの問題に関しては、生活学会などが取り上げているとは思いますが、建築学会に関しては1回のみですね。その他、建築学会の特集を見ていきますと、コロナに関しての研究は結構されているようですが、その中で、特に住まい方というよりは空調などの研究蓄積が結構あるように見受けられます。

以上を踏まえて、家に住むということを再考していきたいのですが、コロナ過によって家で働く、あるいは学ぶということについて、まず前提として、ある日突然に住宅の中に職場や教室が入ったということです。しかし、先ほどのデータでも、われわれの肌感覚でも、都市の住宅にはテレワークの余地が少ない。ないとは言いませんけれども、少ないということが分かります。一方で、それが日本における、特に都市の住宅問題として議論されているかどうかといえば、そんなに議論されていないということが分かりました。

一方で、この大きな理由としては20世紀というものは職住分離が最も進んだ時代といえます。前近代からは急に働きに出かけるということになり、20世紀はさらにそれが加速していったということだと思います。そういった経緯も変遷もあり、再び家で働く、あるいは学ぶということがすごく難しくなっているような気がします。生活学会がまとめた住宅の変遷、職住一帯とか近接しているのは普及するのかという記述をみると、明治期から近代化したと規定した場合、前近代はやはり家業とか、家で働くということが当たり前にあったとされています。住宅は、ある意味併用住宅として特徴的な発展を遂げてきたといえますが、明治期にそれが少し解体されつつあり、その後大正、そして昭和の戦災を受けて大きく変貌を遂げたとされています。さらにそれがLDK化になっていったときに、住宅の空間はより小さく解体され、その後さらに再編されたということになります。日本生活学会の住まいの100年をひもとけば、このように定義されています。それを受けて、やはり最も職住近接が難しくなったこの一つの例として、51C型からnLDKへの変遷があるのではないかとこのところを指摘しておきたいと思います。吉武泰水先生や鈴木成文先生が51C型を提唱されまして、食寝分離や就寝分離として住宅空間を定型化していきます。私は吉武先生、鈴木先生に学びまして、いろいろ話を聞く機会もありました。nLDKに密接に関係していったこの51C型が一人歩きしていくことに対して、鈴木先生は少し自分の思いとは違うという話を聞いたことがあります。この功罪をきょうは問いたいわけではなくて、これがさらに後にわれわれが今日住んでいるnLDKという型に密接に関係しているということを申し上げたいわけです。これが以前にはあった住宅の例えば応接室とか、書斎とか、それから縁側とか、そういった機能を徹底的に排除した上で成立していった間取りであるということは、多分疑いの余地はないと思います。

そこに職場とか教室が入り込む余地がなかなか見いだせないのではないかとこのことが、指摘しておきたい一つの項目になります。それを踏まえて、日本の住宅というのは今後変化するのかということ考えたときには、やはりこのnLDKを超える概念というのはなかなか出てこないような気がしています。もちろん個がいろいろ多様化し、家庭も多様化していくことで、例えばダイニングでご飯を食べない人も今増えているようすし、女性は社会進出をしていますし、いろ

んな状況が変わってくる中で、このnLDKの中でのさまざまな多様化が今行われているような感じを受けています。

先ほどの話で申し上げたとおり、都市住宅に余地は少ないということです。とにかく無駄な空間、ある時期に無駄とされた空間がどんどん排除された結果、気が付けばそこに新しいものが入り込む余地がなかった。加えて、人とつながる機能、例えばそれは縁側や、勝手口とか、外とつながる、地域とつながるような多面的な場所とのつながりというものも消失したと言えます。一方で、クックパッドの調査にありましたが、家族が集まる場所としての住まいの意味みたいなところは、もしかしたら問い直しが始まっているような部分もあるのではないかと思います。ただし、例えば大正の時代から昭和の初期ぐらいにあったような客間、応接室があって、例えばそこまでは人を招き入れて、そこから奥はケの空間として、裏の空間として、生活の空間と明快に分けるようなことはなかなか難しいと思います。

一色先生の話もありましたとおり、住宅の台所が後ろに、裏に引っ込んでしまったということもありますし、このような空間の関係性というのは、もう一度問い直す時期に来ているのではないのでしょうか。

私は神戸のガーデンシティ舞多聞という自然共生住宅の住宅地の計画について、まちのルール、建物のデザインに至るまで住民と一緒に考えていくというプロジェクトを10年前ぐらいに関わりました。ここでは本当に無駄なものだらけですね。曲がりくねった道路。これはなぜかという、地形に沿っているからですが、地形をブルドーザーで真っ平らにしないという計画ですね。それから、塀のない敷地のルールも住民と一緒に建てる前から一緒に考えていくという、ある意味「無駄」な行為をしながら、68世帯を計画する機会を得ました。それも学生と一緒に教育の一環として、先生や学生と一緒にマスタープランから提案したわけです。本当に無駄な空間をかなり作ったと思います。ただし、今でいう無駄な空間ですね。コミュニティについては、お隣さん、向こう3軒両隣まで一緒に作って、グループを組んで、まちのルールまで考えるということで、自立したコミュニティを実現できるのではないかと考えたわけです。

こういう一見無駄と思われるような空間が都市部に出現したことによって、コロナ禍において、ここに住む方たちは恐らくテレワークの余地はいくらでもあったと思うのです。Wi-Fiさえあれば、例えば自分の裏の山とか裏のデッキとかで執務ができたのではないかとと思うのです。実際、こんな大きな敷地割が再び都市部につくれるかどうかは別としても、やはり住むという行為を捉え直す機会になったのかなと思うわけですね。コロナ禍においても恐らくそんなに生活が変わってなかったのではないかとというふうに推察されます。

それでそういった経緯もあって、私たちが今設計している本当に小さな平屋ですけれども、そういう考えが継承されています。この平屋の建て主は若い夫婦です。三宮まで30分ぐらいかかるような農地に囲まれた場所に土地を得て、そして平屋に住んで、縁側とか、外部とつながる機能が求められた結果、実現した住宅計画です。この住宅の縁側の提案した際に、その縁側で仕事ができるような空間を建て主からさらに求められました。これはコロナになって彼らが求めたことです。それから土間ができたりとか、勝手口ができたりとか、そういった今まで排除してきたようなものが復活して、それから和室ですね。先ほどの話にもありました和室も復活しています。こういうことがやりやすくなったのはコロナ禍の影響があるのかもしれませんが、それが本当にそうなのかどうかということは検証が必要ですが、肌感覚としてはそんなふうに思っています。

それから、コロナ禍になって、今、学生と山に入るようになりました。これなぜかという、先ほどの住宅の設計をしていると、ちょうどウッドショックというものに直面するわけですね。それは何かという、コロナ禍で外材が入らない。加えて山火事などが海外であると、さらに外材が高騰する、もしくは入らないということで、木材が手に入らない事態が発生したわけです。そのとき何が行われたかという、国産材に目が行くわけですね。われわれは今まで設計した住宅には国産材を使ってきましたが、今まで外材を使っていた工務店なども国産材を使わざるを得ないと言ってもいいかもしれませんが、注目したわけですね。ただし、日本の多くの山が荒れていて、すぐに国産材が切っていくらでも使えるっていうわけではない状況が明らかになりました。これは逆にこれから住宅のこととか国産材のことを考える上ではいい機会だったのかなと思っ  
ていまして、家と山がつながっていることについて、一体どういう状況になっているのかというのを学生とともに今勉強をしているという感じです。

この事例は、大学の授業の一環でやっているのですが、学生と丹波市に入って、山に入って、その丹波産の木を使ったプロジェクトを行っています。市から丹波市で生まれた赤ちゃんに、丹波産の木の玩具をプレゼントするプロダクトデザインをやってみたりとか、実際、木を食べるとい  
うプロジェクトも学生が始めたりとか、住宅だけじゃなくて、こういう木をどんなふうに使っていくか、国産材をどんなふうに使っていくかというような木域プロジェクトとわれわれ呼んで  
いますけれども、そういったプロジェクトも進んでいます。

つぎにこれもまた来年の生活美学でぜひやってみたいなと思っているプロジェクトなのですが、丹波篠山市で学生と「里山」というものを本気で学ぶという体験をして、古民家を再生をしたり、こ  
ういうことを先駆的にやっている方がいらっしゃいますので、そういった方々のお力を借りながらアカデミックにどう関わられるかみたいところを模索していきたいなと思っ  
ています。

最後までいろいろ話してみたいと思いますが、いろいろ言いましたけれども、都市部の住宅というものはなかなかやっぱり変化が難しい。これは小泉さんの領域になると思いますが、不  
動産と建築の関係がありますよね。なので、建築だけ、上物だけが急に変われるというのはなかなか難しいと思います。都市においては地代も高いですから、間取りがどんどん、いら  
ないと思われるものがどんどん削られて余地がない中で、それを抜本的に変化させるっていうのはすごく難しいし、職住一体・近接は都市の中ではなかなか難しいのではないかと  
いえます。

ただし、その中で今までは寝るだけの空間だったものが、ようやく住むというか、そこで集う  
ということについて、一般の方たちも考えざるを得ない状況になったのではないかと思っ  
ています。これはすごくいいことだなと思っ  
ていまして、つまりそれは都市部であっても住まいの質に関わってくる可能性を示唆しているのかなと思うのです。私個人としては、国産材に市場の目が  
いったことで、日本の70パーセントぐらいを占める森、それに関わる林業がもしかしたら少し良くなるのではないかということも期待したいです。私自身はその木域コミュニティにす  
ごく可能性を感じていまして、その辺のプロジェクトをぜひ学生と学びたいと思っ  
ています。

それから、あと二つですけれども、やはり都市の住宅の変化というものが結構難しいなとな  
った場合には、皆さんも多分ロックダウンのときは外を歩きましたよね。そのときにちょっとした、「ああこの場所いいな」みたいな所に気付いたはずですね。近隣の再発見、住  
まいだけではなくて庭とか近隣の公共施設とかも含めた、何か対応の方策みたいなものが見いだせるのではないかなとも思っ  
ています。

それから、これ最後に申し上げたいのは、研究の領域において、今回のコロナ禍で特に都市の住まい方において、相当苦勞されたと思います。その苦勞、例えばトイレで空間を改変してリモートをなんとかしのいだとか、いろいろあると思います。規定されたnLDKの中で展開した新たな生活の英知っていうものが無数にあって、多分散らばっていると思うのです。それを研究者がかき集めながら、なんとか集約して、次の知見につなげていくということが非常に重要ではないかと感じています。私の報告は以上になります。ありがとうございました。